東洋史研究
第六十四巻　第四號　平成十八年三月發行

姜紹書と王越石

――『韻石齋筆談』に見る明末清初の藝術市場と徽州商人の活動――

井上充幸

はじめに
第一章　姜紹書と『韻石齋筆談』について
第二章　定窯鼎の來歴と丹陽の文雅について
　第一節　丹陽の孫氏と姜氏について
　第二節　常州の唐氏と定窯鼎について
第三章　萬曆年間における仿古趣味と贋作陶磁器の登場
　第一節　周丹泉と陶磁器の模造について
　第二節　「耳食の徒」杜九如と「眞の賞鑒」唐獻可
第四章　王越石について
　第一節　王越石とその一族
　第二節　賞鑒家たちとの交遊（一）――一流の士大夫による評價――
　第三節　賞鑒家たちとの交遊（二）――斜陽のコレクターによる評價――
第五章　徽州商人の活躍と定窯鼎の行方について

第一節　王越石の骨董詐欺と被害者の季因是について
第二節　黄正賓について
第三節　王越石と黄正賓の爭いと定窯鼎の最期
第六章　南明政權下での書畫骨董賣買
第一節　黄正賓の骨董店開店計畫と賀日獻・王君政について
第二節　南明政權と模造定窯鼎の末路
むすびにかえて

はじめに

孫承澤が「甲申の變より名畫は市に滿つ」・「滄桑後、世家の所藏 盡く市賈の手にあり」（『庚子銷夏記』巻三「荆浩山水」・「沈石田煮雪圖」）と繰り返し述べるように、清朝初期は、それまで江南のコレクターのもとに蓄積されていた書畫骨董が大量に放出され、藝術市場の動向に精通した專門の書畫商人たちが中國史上最も盛んに活動し、收藏家たちのコレクション形成に深く關與した時代であった。この點については、古原宏伸氏がつとに指摘され、筆者も前稿において、徽州の書畫骨董商人、吳其貞の動向に卽して論じた。(1) 明清鼎革の混亂期にあって、商人たちがかかる事態に速やかに對處できた背景には、明代末期における書畫骨董の商業化の進展、ならびにそれに伴う藝術市場の成熟があった。(2) この問題を檢討するにあたって、今回筆者は、姜紹書『韻石齋筆談』巻上に收められた「定窯鼎記」を骨子として論じていきたい。

明末清初の賞鑒家として名高い姜紹書は、字は晏如、號は二酉、丹陽の人。著書には『韻石齋筆談』上下巻のほか、明代の畫家の傳記集『無聲詩史』四巻、「性として石を好」み（『韻石齋筆談』巻上「靈巖子石記」）齋號を「韻石」と名付けた彼が、珍奇な石についてまとめた箚記『瓊琚賦』三巻などがあり、明末清初の書畫骨董ブームにかかわる貴重な證言を、自らの見聞を多く織り込みつつ書き殘した。

北宋の時代、とりわけ一二世紀前半の政和・宣和年間に焼かれた定窯の白磁は、すでに明初の段階から文人たちの間で高い評價を受け[3]、明後半期以後は、その希少性も相俟ってコレクターズアイテムとなり、官窯・哥窯の粉青磁器とともに陶磁器の最上位にランクされた。中でも好まれたのが、古代の青銅器の形態に倣って作られた（仿古）、比較的小振りの香爐・香合で、文人の書齋に必備の品としてもてはやされた[4]。「定窯鼎記」は、傳世の定窯白磁の鼎と、その贋作をめぐる騒動の顚末、およびそれに關わった人々の辿った運命が生き生きと描かれ、そこには、明末清初における書畫骨董の「商業化」の進展に伴う諸問題、すなわち賣れ筋商品の眞贋をめぐる問題や、商人による流通・賣買の諸相などが、様々な形で關わってくることとなる。

筆者が前稿第三章で述べたとおり、天啓年間から崇禎年間にかけて、徽州商人による書畫骨董取引は、同姓の一族同士の結びつきを基礎として、あるいは取引を委託された使用人たちによって、江南一帶を股にかけて組織的・廣域的に行われた。その中でも特筆すべき存在が、本論考におけるもう一人の中心人物、王越石である。彼は、同業の後輩の吳其貞に先んじて江南の各地を渡り歩き、書畫骨董の賣買に勤しんだ。徽州商人といえば、同時代の小説や戯曲には、金滿家にして好色漢という俗臭紛々たる敵役と相場が決まっているが、王越石もこれを地でいく活躍を見せた。しかも彼は、かかる小説中の間抜けな手合いとはひと味異なり、生き馬の目を抜く辣腕の商賣人であった[5]。

『書畫記』を書き殘した吳其貞とは對照的に、王越石は自ら著作を書き殘すことは一切しておらず、彼の手を經た傳世の書畫作品にも題跋などを記すことはなかった[6]。そのため王越石の事績については、身内ともいうべき同鄕の吳其貞の記述を除き、あとは全て、顧客として彼と關わりを持った江南各地のコレクターが、題跋や隨筆などの形で書き殘した記錄が主となる。よって、筆者が前稿で、商人の側からの視點に立って論じたのに對し、今回描くのは、顧客の目に映った商人像となろう。以下、姜紹書と王越石という、同世代の對照的な二人の人物を軸として述べる。

第一章　姜紹書と『韻石齋筆談』について

姜紹書に關するまとまった傳記資料や專論は、管見の限りでは見あたらないため、以下、斷片的な記述をもとに、彼の生涯について略述する。(7)

姜紹書が襁褓の頃、紫柏達觀が萬曆一〇年（一五八二）に丹陽の會海庵に滯在し、手づから佛舍利を授けたという。(8) 順治六年（一六四九）九月朔日の年記を持つ『瓊琚賦』自敍を下限とすると、生年は一五八〇年頃、沒年は一六五〇年前後と考えてよいだろう。萬曆・天啓年間の事跡については不詳ながら、「董文敏（其昌）・陳仲醇（繼儒）輩と唱和し、方外忘形の交を爲す」と述べられるように、當時を代表する賞鑒家との交友を傳えられている。(9)

姜紹書が自ら記すところによれば、官僚としての彼のキャリアがスタートしたのは崇禎五年（一六三二）春仲のこと、曾祖父の姜寶（後述）の恩蔭によるものであった。召し出しに應じた彼は、南京を經由して北京に上京、(10) 翌年まで滯在していたが、暇をもてあましては董其昌のもとを訪れたという。(11) 以後は南京より起官し、崇禎九年（一六三六）には南京の軍務に參畫するも、知友と酒を酌み交わしては詩文を應酬し、傍ら名勝と書畫骨董を尋ね歩く日々が續いた模樣。崇禎一五年（一六四二）には南京工部郎中を拜命、玉器や銅器などの寶物を收めた官庫の出納を司ることとなる。おそらく彼の鑑識眼が買われての任命であろう。(12)

甲申後、弘光政權が成立すると（一六四四年五月）、姜紹書はそのまま南京に留まって出仕し、工部尙書の何應瑞のもと、引き續き工部郎中の職に就いた。(13) 翌年五月に弘光政權が瓦解すると、姜紹書は「舊遊を視て畏途と爲し」て故鄕に隱棲し、「明の遺民」としての生き方を選んだという。順治三年（一六四六）秋以降は、地元丹陽にて友人と交際したり、南京・丹徒を訪れたりする日々が續いた。そして、順治六年（一六四九）秋日の記事を最後に、彼自身の手になる記述が終わることは、先に述べたとおり。(14)

『韻石齋筆談』には、順治六年（一六四九）の年記を持つ蔣清（後述）の序文が附せられ、『無聲詩史』や『瓊琚譜』とほぼ時を同じくして成立したことが知られる。現在通行のテキストとしては、『四庫全書』子部一〇雑家類四雑品之屬に所收のもの、乾隆一二年（一七四七）汪道謙の重刊序刊本に基づいた『知不足齋叢書』および『嘯園叢書』所收のもの、さらに江戸松本氏鹿勝文庫刊本（『和刻本書畫集成』第九輯所收）などがある。本論文中での引用は、原則として『四庫全書』本に基づく。また、丸括弧内の文字は、筆者が補ったものである。

第二章　定窯鼎の來歴と丹陽の文雅について

第一節　丹陽の孫氏と姜氏について

「定窯鼎記」の話は、まずこの鼎の來歴から説き起こされる。それによると、定窯白磁の中でも屈指の名品とされるこの鼎は、成化・弘治年間に、丹陽の孫方が所藏していた。後の崇禎年間に、この定窯鼎を實見した人々の證言によれば、高さは五寸・口徑は四寸と小振りで、丸みを帶びた器體に直立する兩耳と三本の足とを有する形態、器全體に細かく施された夔龍紋や饕餮紋など、古銅器特有のモチーフがあしらわれており、まさしく「仿古」作品であった。また、本體の底に「曲水」（孫方の齋號）の印章が彫り込まれていたほか、白玉製の蓋が附され、木製の臺座には、李東陽による篆書の銘文が刻まれていた。(15)

孫方（字は思行、宜齋とも號す）は正德六年（一五一一）の進士で楊愼らと同年、行人を授けられ御史に陞り死去、『管子書』を刻した。曲水山房とは彼の書齋を指す。(16) 弟の孫育（字は思和）は太學生の頃から王鏊・楊一清・靳貴らの門下に遊び、七峯山房を構え、詩文・翰墨の才は唐寅・祝允明らと並び稱されたという（『重修丹陽縣志』卷二〇「文苑」明）。丹徒の名士、楊一清とは緣續き（姻家）であり、孫育は彼の後押しを受け、北京で文華殿に入り書寫の仕事をする傍ら、内閣

中書辦事の京職を授けられた。[17] 明代中期の朝廷にあって重きをなした李東陽と、孫氏兄弟とは、おそらく正德年間頃に北京の宮中で面識を持ち、篆銘も兩者の依頼によって作成されたものであろう。

賞鑒家としての孫育については、姜紹書によって多くが傳えられている。とりわけいわゆる「吳中四才」との交友については、正德五年（一五一〇）には、祝允明が孫氏の所居にちなみ「南山小隱記」を執筆（『韻石齋筆談』巻上「南山小隱」）、同一五年（一五二〇）には、唐寅が南山における諸君子の雅集の様を繪畫に描くなど（『韻石齋筆談』巻上「石壁題名」）、蘇州の著名な文人たちと丹陽孫氏とが、文化面で對等の立場にあったことが示されている。

また法帖については、正德年間に親友の宦官の蕭敬を通じて、宮中より宋刻《淳化閣帖》の碑板を入手、文徵明・祝允明ら蘇州の著名人の鑑定とお墨付きを經て、宋搨の閣帖をそのまま再現した《河莊淳化帖》を作った。孫育はさらに、宋刻の碑板を保護するため、原搨をもとに覆刻して人々の求めに應じ、原搨を《上號》・覆刻版を《次號》と名付けた。この兩者の帖板は、後に失火により消失してしまったが、姜紹書によれば「上海の顧氏本の望む可き所に非ざる」最高の品質を備えたものであったという（『韻石齋筆談』巻下「河莊淳化帖」）。さらに、古印章の蒐集に關しても、上海の顧氏の蒐集した三〇〇〇點あまりのコレクションには、孫育の子、孫楨[18]（字は志周・仲墻、號は石雲居士）から渡ったものが含まれていると述べられ、河莊の孫氏こそがその先蹤をなしたのだ、という點が強調されている（『韻石齋筆談』巻上「秦漢印」）。上海の顧氏に對する對抗意識がうかがわれ、興味深い。

この孫氏と姜氏とは、姜紹書の祖父の代から緣續きとなっていた。姜寶は、字は廷善、號は鳳阿、嘉靖三二年（一五五三）の進士で、五〇年以上もの官歷を重ねた名士であった。姜寶の長男の士麟は、同鄕の名族にして賞鑒家一族であった河莊の孫楨の女を娶り（姜寶『姜鳳阿文集』巻二一「石雲居士孫君墓誌銘」）、文獻中に名前は明記されないものの、彼らの間に生まれたのが姜紹書の父にあたる志魯である。[19] 姜志魯（字は景尼）は、萬曆二八年（一六〇〇）の擧人で工部屯田司主事に至った人物。彼は「多く書畫彝鼎を蓄え」、所藏の《寶晉齋淳化帖》眞本は「神品」と稱せられ、松江を訪問した際に

は董其昌が大急ぎで出迎えたという（『乾隆丹陽縣志』巻一九「撫遺」）。姜紹書の書畫骨董に對する興味と鑑賞眼は、おそらくかかる家庭環境のもとに鍛え上げられた。

第二節　常州の唐氏と定窯鼎について

河莊の孫氏が孫楨の世代に移った頃、丹陽はいわゆる「嘉靖の大倭寇」によって大打撃を被った。[20] 孫楨は「名畫・法書は、嘗て厚く酬いて廣く購い、以て好む所を聚め、久しくして牙籤は萬軸、富と稱すべし矣」というコレクターであったが、この時倭寇の襲撃を受け、姜寶と共に隣の金壇に避難した際、家藏のコレクションの多くが下僕の手によって持ち出され、賣り拂われてしまった（「石雲居士孫君墓誌銘」）。これを境に孫楨の家は沒落、定窯鼎をも手放さざるを得なくなる。さきの印章コレクションが人手に渡ったのもこの時であろう。

最初に定窯鼎を入手した丹徒の靳尙寶伯齡なる人物は、おそらく靳弘を指すものと推測される。彼は、孫育がその門下に遊んだ靳貴の孫に當たり、祖父の恩蔭により尙寶司司丞を授けられている。[21] そして次の所有者も、丹陽に隣接する常州の唐鶴徵であった。彼はこの定窯鼎を自分のコレクションの最上位に置き、「是れ自り海內の窯器を評する者は、必らず首めに唐氏の白定鼎を推す」こととなった。

唐鶴徵（字は元卿、號は凝庵）は隆慶五年（一五七一）の進士で、官は太常卿に至り、傍ら博學をもって知られた人物。彼の父の唐順之も、博學多才な文學者にして倭寇對策にも奔走した行動派の士人として著名。この唐順之の門下には、やはり孫育・孫楨父子と姜宋（字は廷和、姜寶の次兄）・姜寶兄弟が弟子入りしており、中でも姜寶は唐順之からもその實力を認められ、經學に關する著作をものしたほか、歷代の名文家の選集である『文編』六四卷を、唐順之との共同名義で編集してもいる（焦竑『國朝獻徵錄』巻三六「姜尙書寶小傳」）。

以上まとめると、河莊孫氏舊藏の定窯鼎は、孫氏・姜氏にゆかりの深い、いわば「內輪同士」の間を巡ってやりとりさ

れ、かかる高尚な「清玩の具」を持つにふさわしい所有者のもとに落ち着いた、ということになる。ここにおいて、この定窯鼎は、蘇州にも引けを取らない丹陽の文化的傳統を、象徴的に證し立てる品となった。この定窯鼎について語ることは、孫氏およびそれに連なる姜氏こそが、丹陽において風雅を主盟してきたことを江湖の讀者に示すことに他ならず、その傳統は、とりわけ新興の上海顧氏などに比べても由緒正しく、ましてや後段に登場する商人風情などは「耳食の徒」に過ぎない、との主張にもつながっていく。(22)

そしてもう一點重要なことは、姜紹書が、孫氏が沒落した嘉靖末年を、氣心の知れた文人同士による私的な樂しみとして、本來的な意味で「文房清玩」を享受することの出來た、古き佳き時代の終焉として位置づけていることである。これは沈德符ら明末の諸家の認識とも一致する（沈德符『萬曆野獲編』卷二六「玩具」好事家ほか）。そして次からは、從來的な文房清玩のあり方を變質させた「元凶」である山人および商人が、いよいよこの定窯鼎に關わってくることとなる。

第三章　萬曆年間における仿古趣味と贋作陶磁器の登場

第一節　周丹泉と陶磁器の模造について

續いて話は萬曆前半に移り、陶磁器の贋作を生業とする吳門（蘇州）の周丹泉なる人物が登場する。彼は唐家を訪れ、手で定窯鼎の採寸をして紙に文様を寫し取ると、精巧なレプリカを半年のうちに景德鎮で作り上げる、という摩訶不思議な技能の持ち主であった。模造品を示され驚いた唐鶴徵は、所藏のオリジナルを取り出して何度も見比べたが、瓜二つの出來映えである。しきりと不思議がる唐鶴徵からその由來を問われ、周丹泉はついに種明かしをし、結局この模造品は、「太常　歎服して售うに四十金を以てし、蓄えて副本と爲し並べて家に藏す」と、唐鶴徵の所有に歸した。

周丹泉については、味岡義人氏と蔡玫芬氏とによって、多くの事が明らかにされており、(23)以下、これらの研究に卽して

略述する。

周丹泉は、諱は時臣、嘉靖年間の蘇州に生まれ、若い頃は無賴の生活を送っていたが、やがて文徵明の長男、文彭の門人となり、文彭の子の文元發、さらには王穉登・李維楨ら錚々たる文人たちの仲間入りをした。姜紹書は『無聲詩史』巻七において、周丹泉が詩文・書畫をよくする一方、古陶磁・古銅器の倣製や木竹細工などの工藝から造園に至るまで、文人趣味に必須とされる様々な部門にその特異な才能を發揮するなど、萬能型の人物であったことを傳える。やがて彼は崇禎年間に隱棲し、生涯官途に就くことなく沒した。かかる周丹泉のありようは、まさしく典型的な明末の「山人」としての生き方そのものといえよう。(24)

萬曆年間には、周丹泉以外にも古陶磁模造の名手が幾人も存在した。李日華は、萬曆二六年（一五九八）の春に、宮中御用の陶磁器を選別するために景德鎮に派遣され、そこで浮梁の昊十九に出會う。彼は自ら壺隱居士と號し「陶事に精にして、作る所の永(樂)窯・宣(德)窯・成(化)窯は皆な眞に逼る。人となりは亦た文雅にして吟を好み繪畫を喜ぶ」という風流人であった。李日華は自らのアイディアを盛り込んだ「流霞盞」なるオリジナル作品を彼に作らせたという。(25)

かくして萬曆年間には、さまざまな名工たちの手によって古陶磁の倣製品が誕生したが、かかる精巧なレプリカ製作技術が、贋作商賣に容易に轉化していく危險性については、想像に難くないところである。そして實際に、唐家傳世の本物の定窯鼎と、所有者ですら見分けがつかないほど精巧な副本、この兩者が出揃うこととなり、これが後に問題を引き起こすこととなる。(26)

第二節　「耳食の徒」杜九如と「眞の賞鑒」唐獻可

萬曆末年のこと、淮安の杜九如なる富裕な商人がいた。彼は金に飽かせては奇玩を買い求め、殷代の青銅器や漢代の印章二〇〇點以上を蒐集していた人物であり（『韻石齋筆談』巻上「秦漢印」）、この頃には唐氏の所有するこの定窯鼎を欲する

あまり、夢枕にまでその姿が現れるほどであった。一方の唐家は、この頃すでに唐鶴徵の孫である唐獻可（字は君兪）の時代となっていた。客好きで俠氣に富んだ彼は、衣裝と音樂のためなら金に糸目を附けぬ道樂者である一方、「隃麋（翰墨）・丹青に於いては則ち嫺いて之を爲し、書は米體を宗とし、畫は宋元の餘韻有り」と、さすがに名家の出身に恥じない藝術性の持ち主でもあった（『無聲詩史』巻四「唐獻可」）。

唐獻可のもとに千金を携えて押しかけた杜九如は、一目でいいから祕藏の定窯鼎を見せて欲しいと懇願したところ、人の悪い唐獻可はわざと周丹泉が作った模造品を出して示した。ところが、感動した杜九如はとうとう持參した金を押しつけて、贋の定窯鼎を持ち歸ってしまう。唐獻可も、さすがにこれほどの大金を騙し取るつもりなどなく、門下の士を遣って杜九如に事實を告げた。惜しくなって取り返しにきたものと思いこみ、いよいよ手放すまいとする杜九如に對し、唐獻可が本物を出して見せてやったところ、彼はようやくにして納得したという。そしてついには念願かなって、定窯鼎は正本・副本ともに杜九如の手に渡ることとなった。(27)

姜紹書は、このいきさつを「虬髯の文皇に遇いたるが若く、各おの龍虎の表を具すると雖も、而れども神彩煥發なること自ずから常と異なる也。此れ由り知る、九如は葉公の好に過ぎずして原より眞賞に非ず、君兪は襟度人に過ぐること遠きを矣」と評する。要するに、商賣人上がりの杜九如の骨董趣味はうわべだけのものに過ぎず、また彼の見る目がまるでないからこそ、名家の出身で眞の賞鑒家でもあった唐獻可の度量の大きさが對比的に浮かび上がり、その點がこの話のミソである。(28)

以上、これだけであれば罪のない笑い話で濟むのだが、いささか間抜けな杜九如とは對照的な悪辣な商賣人として、いよいよ王越石が、この話を枕として登場する。

第四章　王越石について

第一節　王越石とその一族

ここで、王越石とその一族について概観しておこう。王越石は、諱を廷琣といい、休寧縣の東南一五里に位置する居安の出身（曹嗣軒等『新安休寧名族志』巻一「居安王氏」）。吳其貞によれば、こういう人物であった。

越石は居安の人にして、黄黄石と姑表の兄弟爲りて、顒若の親叔に係るなり。一門數代は皆な骨董を貨り、目力は人に過ぐ。惟だ越石の名は天下に著れ、士庶服膺せざる莫し。客游すること二十年にして始めて歸り、特に諸玩物を携えて余を怡春堂に訪ね、盤桓すること三日にして而して返る。時に壬午（崇禎一五年・一六四二）五月既望の日（『書畫記』巻二「王叔明破窗風雨圖紙畫一卷」）。

黄黄石は、諱は正賓、字は賓王、黄石はその號。彼は同郷の王越石と從兄弟關係にあり、兄の黄山とともに「士夫中の賞鑒の名家爲り」と評されるなど（『書畫記』巻一「趙松雪前後赤壁圖絹畫一卷」）、「古玩」の蒐集と鑑賞についてもひとかどの人物であったが、彼と王越石との關係については後に述べよう。[29]

王越石の一門は、數世代にわたって書畫骨董の賣買を世業としており、『書畫記』には他にも、弟の王弼卿・紫玉、越石の從姪で「亦た骨董を業とす」る王君政（後述）、揚州に寓居し「書畫を鑒賞するに家傳を得」た姪の王晉公など、數人の名が散見する。[30] 中でも吳其貞と仲がよかったのが王顒若であった。彼の所有する元末の山水畫家、陸廣の作品と、自らの所有する漢代の玉璋とを交換した際、吳其貞は、「三世 皆な骨董を業とし、目力は人に過ぐ。人となり溫雅にして、余 一たび見えて便わち莫逆の交を爲す」という閑柄であったことを述べている（『書畫記』巻一「陸天游草堂小紙畫一幅」）。

この一族の内、最も著名なのが王越石であった。崇禎一五年（一六四二）五月一六日に、様々な蒐集品を手に吳其貞の

居處を訪れた彼は、以後一〇月までのしばらくの間徽州にとどまり、「此の圖（宋の孫知微《產黃庭圖》）、向に藏して溪南に在り。昨て王越石 之を得るところと爲り、以て至寶と爲し售るを肯んぜず。余 深く之を妒む」などと（『書畫記』卷二「孫太古產黃庭圖小絹畫一幅」）、自慢の品の數々を見せびらかしては、吳其貞を羨ましがらせることとなる。そして、王越石の所有するコレクションは、さきに吳其貞も述べた通り、萬曆末年より二〇年もの間、書畫舫を仕立てて徽州の外に出、様々なコレクターとの活發な交遊・取引を行った結果、蓄積されたものであった。この間の彼の事績については、諸家の題跋や隨筆に散見しているので、次にそれを追っていこう。

第二節　賞鑒家たちとの交遊（一）――一流の士大夫による評價――

【董其昌】

董其昌は、言うまでもなく明末を代表する賞鑒家の一人である。彼は親友の陳繼儒とともにしばしば徽州に足を運び、當地の大コレクターであった吳廷と共同で《餘淸齋法帖》を刊行するなど、書畫の蒐集と鑑賞をはじめ、徽州における文化全般にも深く關わった人物であった。[31] 彼も王越石と面識があったようである。

郁逢慶『郁氏書畫題跋記』には、王越石の所有する法帖に董其昌が附した題跋が著錄されており、《復州裂本蘭亭》については「越石の此の本の如きは絕勝たり」と評し（『郁氏書畫題跋記』卷一「復州裂本蘭亭」）、《泉州帖》については「此の宋搨は至って佳なる者にして、海上顧氏の所藏たり。奕奕として神氣有り、眞に墨池の奇寶なり。今 越石に歸す、珍重すべし、珍重すべし」と（『續題跋記』卷一二「董玄宰跋泉州帖」）、いずれも名品であることに太鼓判を押している。年紀は記されていないが、おそらく天啓年間から崇禎年間の始めにかけて記されたと思われる。

一方で、董其昌は『畫旨』において、「此の卷、王越石の爲に倪迂（瓚）の設色《山水》を以て易去せらる。猶お恐るらくは、新都（新安）に收藏家多く、素封の手に轉入して韻ならざるを」と述べている。「此の卷」がどの作品を指して

いるかは不明であるが、王越石の手によって、貴重な名品が見る目のない金持ちに轉賣されてしまうことを危惧しており、こうした面においては信用のならない人物であることを述べている。結局この作品は、「今又た遜之璽卿の所收と爲り、歸する所を得たり」と、幸いにも落ち着くべき所に落ち着いたのではあるが。[32]

【李日華】

ほぼ同時期に、嘉興の李日華も、たびたび王越石の來訪を受けている。[33] 李日華『六研齋筆記』巻四によれば、天啓六年（一六二六）二月、「歙友」の王越石が《長沙帖》四册を持參し、作品の鑑定を求めて訪問、李日華も快くこれに應じ、その來歷や法帖の狀態などについて事細かに述べた後、「今 越石の得たる所の四本、之を細玩するに、所謂 筋力芒采は咸な在り。其の《長沙》爲ること疑い無し」と、最大級の贊辭を送った。[34]

また畫作品では、崇禎元年（一六二八）三月に、中央への出仕要請を受け南京の西察院に滯在中であった李日華のもとへも、王越石が卷軸を携えて訪問してきている。この中の一つに、倪瓚の彩色畫《山水小景》一幅があり、李日華はこれを「眞の傑作なり」と絶贊している。[35] 李日華は七言律詩の題辭の中で、王越石を指して「書畫の友」とまで呼んでおり（『恬致堂集』巻六）、兩者は相當親密な閒柄であったことがうかがえる。

こうして李日華は、王越石を通じて數々の名品を鑑賞していたが、その中で、趙孟頫の楷書の名品《玄妙觀三門記》について、王越石が手當たり次第に書畫の作品を買い漁っていなければ、因緣深い兩者（《殿記》及び《三門記》のこと）を揃って目にし、錯簡に氣付くことも難しかったであろう、と述べている。[36] また、王越石所藏の畫册に附した題跋には、「越石は百畝の園田を破り、半生の心力を竭して而る後此れ有り」とあり、[37] 彼の書畫收集に對する熱意と行動力とを稱える。

以上、吳其貞が述べたように、王越石の書畫骨董に對する鑑賞眼については、當時を代表する一流の士大夫であっても、一目置かざるを得ないほどであったことは確かであろう。當時の書畫商人と文人とは、持ちつ持たれつの關係にあった。明末の藝術市場の動向に深く通じた董其昌は徽州商人と手を組み、彼らの行動力・情報力を利用して自らの名聲を高める

ことに成功した。また、李日華も、徽州人をはじめとする書畫骨董商人と日々接し、彼らが持ち込んできた作品の鑑定・格付けを引き受けることを通じて、一流の賞鑒家としての地位を確立していった。(38) 一方で、作品を持ち込む商人の側にとっても、當代きっての文人にお墨付きを頂戴することは、商業上大きなメリットがあったことは言うまでもない。彼ら一流の文人がその趣味生活を送る上で、徽州商人は缺くことの出來ないパートナーであり、王越石はまさしくうってつけの人物だったのである。

第三節　賞鑒家たちとの交遊（二）——斜陽のコレクターによる評價——

【張丑】

しかしながら一方で、經濟的に苦境に立たされ、蒐集品を手放さざるを得なかったコレクターたちの中には、彼らの足下につけ込んで買いたたいていく王越石に對して、憤懣やるかたない者たちも存在した。その一人は蘇州のコレクター、張丑である。

張丑の一門は、高祖の元素以來、五世代に渡って書畫骨董の蒐集に力を注ぎ、彼の曾祖父の子和は沈周と交遊、祖父の約之は文徵明と姻戚關係を結ぶなど、地元の蘇州における名家であった。ところが、張丑の代に至って經濟狀況が惡化し、一門のコレクションはほとんどが散逸してしまう。これが執筆動機となって、彼は自らの見聞と博搜した諸史料を基に、『清河書畫舫』一二卷、その續編ともいえる『眞蹟日錄』四卷、蘇州の大コレクター韓世能の書畫コレクションを列擧した『南陽書畫表』上下卷、父の張應文の遺稿を增訂した『清祕藏』上下卷など、膨大な量の書畫錄を書き殘した（張丑「清河祕篋書畫表」）。

先祖から代々傳わる名品の數々を、彼は泣く泣く手放しつつ生計を支えていたが、その彼のもとに王越石が訪問し、コレクター垂涎の蒐集品、とりわけ倪瓚の作品を持參しては見せびらかしていたようだ。張丑によれば、兩者のつきあいは

萬曆四五年（一六一七）三月二〇日からすでに始まっており、この時彼は從來知る人の少なかった倪瓚の作品を見出したことを、驚きをもって記している（『清河書畫舫』卷一一補遺「雲林水竹居圖」）。また別の所でも「越石の舟中にて著色《僦居城東圖》に瞻對す。是れ雲林の絶品にして、之が爲に喜びて而して寐ず」と、繰り返しこの經驗を語る。[39]

これ以後、年次は記されていないものの、王越石の手によって數多くの作品が張丑のもとに持ち込まれており、いずれも錚々たる諸名家の鑑藏を經た、傳世の名品ばかりであったことを傳える。[40] 張丑自身の所藏作品を王越石に讓り渡した事例としては、周昉《春宵祕戲圖卷》が擧げられるのみだが（『清河書畫舫』卷四補遺）、おそらく相當數の作品を取引したものと思われる。やはり彼にしても、王越石の實力そのものは、いやでも認めざるを得なかったのだが、それについてはまた後に觸れよう。

【汪砢玉】

もう一人、王越石と頻繁につきあっていたのが、嘉興在住のコレクター、汪砢玉である。

汪砢玉は、父の繼美から受け繼いだコレクションをもとに、膨大な收藏量を誇った人物である。同鄉の李日華との緣組みを果たし、順風滿帆であった彼の人生は、天啓末年の第三回目の「黃山の獄」に、親友の程季白とともに卷き添えとなり、資產の大半を失うこととなってから一擧に急變する。そして、これがきっかけとなって、大部の書畫錄『珊瑚網』を編纂・執筆することとなるのだが、このいきさつについては別稿にて論じたい。

この弱みにつけ込んで、しばしば彼のもとを訪れては數々の所藏品を入手していったのが、ほかならぬ王越石であった。汪砢玉は、唐・宋・元の諸名家の作品を集めて作成した《韻齋眞賞》という畫冊にまつわる思い出として次のように述べている。

崇禎七年（一六三四）秋のこと、王越石が書畫骨董の買い取りを持ちかけてきた。このとき彼は、南京で兪鳳毛なるコレクターと取引をした際に、汪砢玉舊藏の《韻齋眞賞》二冊組を入手しており、おそらく同時に、汪砢玉の窮狀について

も、ハイエナの如く嗅ぎ付けていたのであろう。結局、汪砢玉は「余 遂に之に我が故物と易えるを聽し、卽ちに其の半ばを汰去す。但だ頓かに舊觀に還るのみならず、幅幅は皆な胡麻餘の仙子ならんか」[41]と、思い出深い畫冊を取り戻すために、手許に殘っていためぼしいものを全て王越石に賣却するはめになってしまった。[42]

また、話が前後するが、同年秋九月九日には、汪砢玉は王越石が持參した定窯鼎を目睹している。この時王越石は、かの項元汴が三〇〇〇金を積んですら、この定窯鼎を入手できなかったことを誇らしげに吹聽し、[43]これまでに蒐集した法書や硯など數々の古玩は、所詮その引き立て役に過ぎない、などとうそぶいた。これに對して汪砢玉も、彼の書畫舫こそ「寶定」、すなわち定窯鼎を寶とする舟と呼ぶにふさわしいと、垂涎の思いを禁じ得なかった（『珊瑚網』卷四四「勝國十二名家」）。この時の王越石の科白、「米家の書畫船に此の物少くべからず」とは、言うまでもなく、奇岩怪石を偏愛した米芾の故事をふまえたもの。むろんこれは、汪砢玉の所有する奇石を卷き上げるための口實として語った冗談ではあるが、自らの書畫舫を、中國の藝術史上に著名な米芾のそれになぞらえるというのは、やはり王越石が自らのコレクションに對し、質・量共に並々ならぬ自負を抱いていたことの現れと見てよいであろう。彼の得意や思うべしであるが、以下に述べるごとく、憎まれ口の一つも言いたくなる姜紹書の氣持ちも分からぬではない。

第五章　徽州商人の活躍と定窯鼎の行方について

第一節　王越石の骨董詐欺と被害者の季因是について

以上、江南各地のさまざまなコレクターのもとを出入りしては、金に飽かせて様々な書畫骨董作品を入手していた王越石であったが、彼の悪名を一躍高からしめたエピソードを、再び「定窯鼎記」に戻って紹介しよう。[44]

杜九如の死後、彼が入手した唐氏定窯鼎の正副一式は、彼の息子に受け繼がれた。姜紹書から「奇貨を居きて以て刀錐

を博くするに慣る」、つまり機會に乘じてはわずかな元手で大金をせしめることを常とした、と評される王越石は、杜九如の息子に對し、花街での遊興費を肩代わりしようと申し出て、定窯鼎の入手に成功。これに萬金の價を付け、この後一〇年以上にわたり、諸方に轉質しては儲けを增やすこととなった。王越石にとってこの定窯鼎は、重要な投機商品だったのである。吳其貞は、王越石の兄弟叔姪が、一二〇〇緡を共同出資して購入費用を賄った、と、同鄕人ならではの情報を傳える（『書畫記』卷二「蘇黃米蔡詩翰四則爲一卷」）。やはり王越石の活動も、一族の結束により支えられていたことがうかがえる。

のみならず、王越石は、これとよく似た圓形や方形の白磁の鼎を用意して、あちこちで見る目のないコレクターを捕まえては賣りつける、という詐欺までも働き始めた。明朝開國の功臣、魏國公徐達の一〇世の孫である徐弘基は、さすがに王越石の欺瞞を見拔いたが、季因是の場合は無知が災いして被害者の一人となってしまった。

季因是は、諱は寓庸、泰興の人。前稿の第五章第二節でも紹介したとおり、彼は明の最末期から淸の康熙年閒にかけて、多數の書畫を手當たり次第に蒐集した人物である。彼は吳其貞をはじめ、徽州の書畫商人とはゆかりの深い人物であったが、當初は王越石に騙されていることにすら氣付かなかった。ところがある日、唐氏と同鄕の趙再思（不詳）なる人物が彼のもとを來訪し、眞相が發覺することとなる。

季問うに「唐家の定窯の方鼎、君曾て見たるや否や」と。趙生大笑して曰わく「唐の定鼎 體は圓にして而して足は三なり。公の云える方鼎は何くに居るや」と。

茫然自失した季因是は、門下の屈靜源（不詳）なる人物に法的手段を講じるよう依賴、王越石はあやうく監獄入りになりかける、という事態にまで至った。姜紹書によれば、季因是はきわめておおらかな性格の持ち主で、彼の書畫骨董コレクションも、眞贋にこだわらず自分の氣に入った物を買い續けた結果、自ずと良い品が集まって出來たもの、と評している（『無聲詩史』卷四「季寓庸」）。書畫骨董を扱う商人に對し、極めて鷹揚だった彼が、これほど激怒するとは、王越石とし

ても想定外だったと思われる。しかしながら、ここでも和解のために差し出した白磁の鼎は贋物であり、結局は王越石のしたたかさの方が一枚上手であった。彼は、李日華や張丑らの所でも示したように、書畫骨董に對する相手の鑑賞能力を正確に把握し、そのレベルに應じて出してくる商品を變えていたのである。

姜紹書は崇禎一四年（一六四一）に季因是の書齋を訪ね、所藏の古玉奩を鑑賞しており（『瓊琚譜』巻上「古玉奩」）、この時に王越石の悪行についても、つぶさに耳にしていたことであろう。それにもかかわらず、この事件の顚末を以上のような形で記したところを見ると、どうやら、賞鑒家としての季因是に對する姜紹書の評價は、吳其貞と同じくあまりかんばしいものではないようである。所詮は彼も「耳食の徒」に過ぎなかったのだから。

第二節　黄正賓について

續いて姜紹書は、王越石と黄正賓との間に起こった定窯鼎をめぐる事件に言及する。まずここで、後半部分の影の主役である黄正賓について略述しておこう。

居安の黄氏は、元の至正一〇年（一三五〇）にこの地に移住してきた伯善を始祖とし、明代後期には主として捐納によって官位を得る者が相次いだ（『新安休寧名族志』巻一「居安黄氏」）。黄正賓も、やはり捐納によって武英殿中書舍人となったが、萬曆一九年（一五九一）八月に、いわゆる立太子問題にまつわる報復人事をめぐり、内閣大學士首輔の申時行を痛烈に批判、官籍を剝奪された。[45] 後に撫按の推薦を經て、萬曆三二年（一六〇四）に前職に復歸、李三才の腹心として東林黨の活動に深く關與するも、反對派からの彈劾を受ける。[46] 天啓元年（一六二一）には太僕寺寺丞より尚寶司少卿に昇進したが、[47] 病氣を理由に歸鄉。同四年（一六二四）には汪文言の獄に連座、崇禎元年（一六二八）に三たび起用され、同年六月に閹黨の徐大化・楊維垣らを摘發、このことは、後の弘光政權下における報復人事につながる伏線となった（後述）。結局、彼は崇禎帝からすぐに罷免されるのだが、この一連の活動により、黄正賓は東林派の士人たちから清議派と目され、

大いに面目を施したという（『明史』巻二三三「羅大紘傳」附ほか）。

従兄弟の王越石と同じく、黄正賓も書畫骨董の取引においては相當のやり手であったらしい。姜紹書の傳える所によれば、淮陽巡撫時代の李三才は書畫骨董の蒐集に餘念が無く、彼から鑑識眼を見込まれた黄正賓は、數々の名品を買い漁るよう委託され、傳世の文王鼎を一三〇〇金で購入したことが一躍世間に知れ渡ったという（『韻石齋筆談』巻上「文王鼎」）。萬曆三七年（一六〇九）に邵輔忠が行った彈劾上奏の中では、黄正賓が鹽商人から多額の賄賂を受け取って宦官へ取り次いでいたこと、公用と稱して地方に赴き恐喝して回っていること、蒐集した書畫骨董が李三才から萬曆帝と母の慈聖皇太后への獻上品として使われていること、などが擧げられている。[48] その使い道がどうあれ、黄正賓が李三才のために書畫骨董の蒐集に奔走し、自らもコレクションを充實させていたことは事實のようである。[49] 李三才の死後、彼の息子の手によって處分された文王鼎を黄正賓はまんまと入手、これとは別に購入していた彝爐・花觚とあわせて、この三つの古銅器を「三絶」と稱して誇った。このコレクションに對する韓芹城の羨望ぶりは一方ならず、「徘徊歎賞し、幾んど米顛（芾）の禮石に同じ」有様であったが、結局入手できなかったという。[50]

第三節　王越石と黄正賓の爭いと定窯鼎の最期

崇禎末年のある日、王越石が黄正賓から轉賣を依頼されて手許に預っていた、倪瓚の作品をめぐって悶着が起こった。ここで問題となった倪瓚の《山水》なる作品の正體は定かでないが、王越石自身が羨むほどの作品であった所を見ると、かなり優れたものであったことは確かである。董其昌が倪瓚の作品を文人畫の正統として位置づけ、「雲林の畫、江東の人は有無を以て清俗を論ず」と（『畫禪室隨筆』巻二「題倪雲林畫」）、その作品を所有することがコレクターにとってのステータスシンボルとなって以來、需要の增加に應じ、眞作をはるかに上回る數の贋作が世上に流布した。そしてさきの李日華・張丑らも目睹したように、王越石は、おそらくは眞贋取り混ぜて、この人氣商品を精力的に商っていた。ここでも

彼は、この《山水》をもとに、贋作の名手を雇って複製品を作らせ、その出來映えには自信満々だったはずである。

ちなみに王越石は、一つの青銅の鼎を分割して、作った本人にも見分けがつかぬほどの、四つの精巧な贋物を仕立て上げた、という話にも顔を見せており、基本的にあらゆる商品について贋物を用意することが可能であった。[51] これは吳其貞の一族の事例であるが、「茂貞叔」吳民は、明以前の様々な種類の陶磁器を模造して、その出來映えは眞に迫り、世間ではこれを「民窯」と稱したという。このことは、一族ぐるみでの贋作賣買にも卽座に轉化しうる倣製品を作成できる技術者が、吳其貞の一族中に存在していたことを示している。[52] また「元振兄」吳明鐸は、人となり風雅にして詩畫を善くした人物だが、吳其貞は臧良《雙雀圖》の黃公望の題識だけを殘して、新たに二羽の雀と竹石とを明鐸に描かせて「補修」したという。吳其貞は、商賣上の意圖からではなく「一時の游戲」と冗談ごとにしてしまっているが、彼らが取り扱う商品に對する信憑性の危うさがよく示されているといえよう（『書畫記』卷二「臧良雙雀圖紙畫一小幅」）。また「龍媒姪」吳家駒は、印章の模刻を行っていたという（『書畫記』卷一「宋復古崇山茂林圖大絹畫一幅」）。書畫の贋作を作成する上では、鑑定の決め手となる印章の僞造も重要なポイントであるが、彼がそうした方面にまで手を染めていたかどうかは判然としない。しかし、さきの吳民の模造陶磁器などと同じく、このような技術者が吳氏の中にもいた、ということは事實である。王越石の場合も、このような人脈を驅使して、贋作商品をたちまちの内に調達していたであろうことは想像に難くない。

ところが、一方の黃正賓もさるもので、王越石の手の内を知り盡くしている彼は、轉賣を委託する際、《山水》の目立たぬ箇所に、あらかじめ目印を記しておいたのである。そして、王越石が素知らぬ顔で返してよこした品は、案の定すり替えられた贋物であった。こうなるともはや狐と狸の化かし合いなのだが、黃正賓が差し向けた蒼頭の佛元なる人物が、定窯鼎を持ち逃げしようとしたために、事態はさらに紛糾し、

正しく誚讓せるの閒に、佛元 傍ら從り鼎を執えて、兼ねて左右の指を以て鼎の耳に掘げ、以て還す無きの理を示す。廷琣 之を奪わんとするに、鼎 地に墮ちて裂瓦の如し。廷琣 恨み絶頭し、正賓を撞きて脇を傷つく。時に正賓 弘光

帝に逐われ、鬱鬱として樂しまず、又た廷晤の侮りに遭いて、越夕奄ち逝き、廷琣も宵に遯れて杭に潛蹤す。

といういきさつで、兩者が押し問答をしている閒に定窯鼎は粉々に碎け、二人の中も決裂してしまう。後段の話の流れから、この時に壞れたのは唐家傳來の本物の方であろう。

黄正賓が、いつから弘光帝のもとに出仕していたかについては現在の所不明だが、一六四四年（甲申）九月初めの彼の追放に關しては多くの史書に記されている。許重熙が、逆案の首謀者とされた周鑣らの逮捕と併記し、李天根が、さきに黄正賓に彈劾され南京に潛伏していた徐大化の報復と明記するように、閹黨派の馬士英が阮大鋮を政界復歸させるに當たり、東林派の人士を相次いで政權から驅逐していった中で起こった事件である。[53] 當時、同じく南京に出仕していた姜紹書も、錦衣衛と五城御史が出動したこの騒ぎについて、直接見聞したはずである。よって、定窯鼎が割れたのはそれ以降、この歳の晩秋から冬にかけての時期となろう。

第六章　南明政權下での書畫骨董賣買

第一節　黄正賓の骨董店開店計畫と賀日獻・王君政について

この事件の後、徽州を去った黄正賓は、なんと姜紹書の地元の丹陽に姿を現した。「弘光の閒」とあるので、先の事件が起こった一六四四年冬から、弘光政權が崩壞した翌年五月までにあった出來事である。この動靜について、姜紹書はこう記す。

弘光の閒、黄石　曲阿（丹陽）に流寓す。…（中略）…黄石　懋遷起家し、仕えて璽卿に至ると雖も、而れども會計の精微なること、羣賈　推して領袖と爲す。（賀）日獻　素より厚資を擁し、牙籌營運し、日々惟て孳孳たり。兩意相い孚すれば、賀　千金を出して黄に授け、將に肆を金閶に列し、而して什一を逐わんとするなり（『韻石齋筆談』卷上「文

王鼎」)。

賀日獻なる富裕な商人のもとに流寓していた黄正賓は、舊知の彼を商賣上のパートナーとして、蘇州の繁華街である金閶に店を開こうと計畫していたというのである。この店とはもちろん、田藝衡『留青日札』に「今雜玩寶貨を賣る肆を「骨董鋪」と曰う」とあるところの、書畫骨董を販賣するための店舗であったに違いない。明末の江南の各都市には、常設の骨董品店が多數登場し、文人たちも、散歩を兼ねて、氣輕にこうした店をひやかしてまわるのを常とした。

李日華は杭州の六橋に足を運んだ際、項承恩なる老人が經營する小汚い骨董店を訪問しているが(『味水軒日記』卷四、萬曆四十年二月二十三日條)、後日再びこの店を訪れた際の記事には、この店主について、前稿第五章第一節にて記した蘇州の歸希之と同じく、浮き世を離れて清貧に甘んじ、書畫を友として日々を送る、偏屈な獨り者の老人として描寫する(『味水軒日記』卷四、萬曆四十年八月十一日條)。そしてその店舗については、住居の前面を店舗スペースとし、そこに陶磁器や盆栽などの細々したものを並べ、客が法書・名畫を携えて來れば財布をはたいて買い取り、埃まみれの店内に堆く積み上げていた、と傳える。(54)

おそらくこうした店は、單に書畫骨董を賣り買いするだけではなく、店の構え・雰圍氣や、店主の個性そのものが一つの賣りであって、そのような場において交わされる四方山話は、そこを訪れる文人たちにとってこよなき樂しみでもあったであろう。蘇州では、家具調度をしつらえ、香を焚き茶を點て、あたかも文人の書齋をそのまま切り取ってきたような場所で客を迎える、「骨董攤」や「清客店」などといった店が繁盛したという。(55) ここは、文人の趣味生活そのものを賣りにする一種のショールームであって、半可通でも氣輕にその雰圍氣に浸ることができる、という趣向である。

黄正賓に話を戻すと、官僚としてよりも、むしろ理財の才による評判が高かった彼の試みは、程なくして蘇州で客死してしまったことで未完に終わる。そして彼の愛人が保管していた文王鼎・彝爐・花觚の古銅器三點は、運轉資金回收に伴って賀日獻の手に渡ることとなった。(56) 先に韓芹城なる人物を紹介したが、北京において彼の口からこれらの評判を聞きつ

けたのが、王鐸の弟の王鏞であった。王鏞と姜紹書とは、すでに南京において酒を酌み交わす仲となっていたが、彼は順治五年（一六四八）冬に金衢へ赴任する途上、姜紹書の家を訪問し、文王鼎が同邑の賀氏の所有に歸していることを、おそらく耳にした。[57]

そしてここに「歙人の王君正」なる人物が登場する。彼は先にその名を擧げた、王越石の從姪「王君政」と同一人物とみて間違いない。彼もまた、この歳の暮れに評判の文王鼎を見せてもらおうと姜紹書に仲介を依頼するが、重病に罹っていた賀日獻は數日後に死去してしまった。拔かりなくこのチャンスを捉えた王君政は、王鏞に急遽通報して古銅器購入の斡旋を申し入れたところ、王鏞はすかさず莫大な購入資金を送金し、「三絶」と稱された文王鼎・彝爐・花觚を全て入手することに成功した。[58]居安の王氏一族に恥じない書畫骨董ブローカーとしての手腕はさすがであるといえよう。『書畫記』所收の記事を見ると、王君政と吳其貞は、順治八年（一六五一）八月望日に杭州・翌年仲秋七日に常州・さらにその翌年八月五日に蘇州の王君政の寓居・順治一三年（一六五六）三月一三日には丹陽と、[59]互いに大運河沿いを書畫舫で盛んに往還しつつ接觸を繰り返した。吳其貞に引けを取らない情報への敏感さと行動範圍の廣さがうかがえる。吳其貞・王君政と丹陽との關わりについては、後にもう一度觸れる。

ともあれ、江南一帶を襲った乙酉の動亂をよそに、むしろその狀況を逆手にとって利用しつつ、骨董品の取引にうつつを拔かす彼らの姿には、驚きあきれるよりほかはない。

第二節　南明政權と模造定窯鼎の末路

一方の王越石であるが、黄正賓とのいざこざの後、徽州にいたたまれなくなった彼はこれに懲りず、今度は杭州において、手許に殘った周丹泉作の定窯鼎を使って最後の詐欺を働く。

爾の時 潞藩 杭に寓し、定爐の名を聞きて、承奉の兪啓雲を遣わして諮訪せしめ、廷琣に湖上に遇う。贋鼎を出して

誇耀するに、臂を把えて甚だ歡び、相い見ゆるの晩きを恨み、引きて潞藩に謁し、酬ゆるに二千金を以てす。承奉私に四百を得、千六百金を以て廷琣に畀う。

福王朱由崧とともに、李自成軍の手を逃れた潞王朱常淓は、一六四五年六月まで杭州にいたので、さきに黄正賓が客死したのとほぼ同時期に起こった話ということになる。この潞王はまた、經典に精通して潞佛子と名のり、書畫に巧みで蘭を描くのを得意とし、材料を吟味して潞琴と稱せられる琴を作るなど、風流な趣味人でもあり、自らの危機的狀況をよそに、書畫骨董の蒐集に狂奔していたという（林慧如『明代逸聞』卷八「潞王府珍物」）。この潞王の趣味につけ込んで、まんまと仲介料をせしめた承奉の俞啓雲なる人物もさることながら、何喰わぬ顔で贋物を獻上する王越石も、實に商魂逞しい人物と言わざるを得ない。

書畫骨董趣味に關しては、弘光帝も潞王におさおさ引けを取ってはいなかった。[60] 姜紹書は、弘光帝が玉璽を作らせた際の無駄遣いについて、自らの經驗談をこう語る。

崇禎甲申（一六四四）五月、弘光□（原缺）卽位し、詔を下して玉璽を制らしむ。大司空何應瑞 其の事を董すに、賈人 玉璞を以て來獻す。…（中略）…余 心に其の良璧に非ざるを知るも、而れども言わず。賈人 其の願いを滿たさんことを冀い、仍りて李姓なる者を挽きて居間せしむ。乃ち大司空の幕賓なり。翌日、堂札を出し、七百金を酬ゆ

（『瓊琚譜』卷中「國寶緒言」）。

商人の持ち込んだ質の悪い玉材を、七〇〇金という法外な言い値で購入して使用、その際に仲介者がリベートを取る、という構圖は、さきの定窯鼎の場合と全く同じである。當事者の姜紹書は、事情を知りつつ默りを決め込むが、內心は不平たらたらであった。この後も工部からは、宮中で使用する器物にかかる莫大な費用を節約するよう上奏が相次いでいる。[61] 南明政權下では、自らの運命を豫見したかのように、君臣ともに上下を擧げて刹那的な贅澤三昧にふける、という末期症狀を呈していたのである。

結局、ある厨役に預けられていた周丹泉作の贋の定窯鼎は、足が折れてしまい、愚鈍な厨役は自殺、壊れた鼎は錢塘江に棄てられ、潞王と運命を共にしたという。一方、最後まで無節操な王越石の、その後の行方は杳として知れない。

むすびにかえて

以上、不行跡きわまる王越石の行跡をたどってきたが、張丑は、彼の人となりについて、

越石 人となりは才有りて行無く、生平專ら說謊を以て事と爲す。詐僞百出するも而れども頗る眞見有り、余 故に誤りて之と游ぶ。亦た鷄鳴狗盜の流亞なり（『淸河書畫舫』卷四補遺「倪元鎭秋林野興圖詠」）

と、苦々しく述べる。おそらくこれは、彼と關わりを持った、あるいは持たざるを得なかったコレクターたちの僞らざる氣持ちを、端的に代辯したものであるといえよう。

定窯鼎をめぐる事件の顚末を認めた姜紹書をはじめ、明末淸初の人士は概して徽州商人に對し點が辛く、このほか樣々なところで筆誅を加えている。しかしその背景には、地元に代々傳わる名品の數々を買い漁り、他所へ轉賣していった徽州商人に對する生々しい記憶、そして恨みの氣持ちが根深く存在していたのであろう。いずれにせよ、このような話が「いかにもありそうなこと」として、充分なリアリティを伴って、描き手と讀み手の雙方に認識されていたのである。

ともあれ、ここで注目すべきは、明末淸初にかけての徽州商人の中には、當代一流の文人・士大夫にも引けを取らない鑑賞眼を備えた人物が輩出し、當時の文房淸玩趣味の重要な一翼を擔ったことである。古くは、嚴嵩の爪牙となって古玩の蒐集に狂奔した惡名高き羅龍文や、李三才からの委託を受けて活動した黃正賓など、權門と結びついて仕事を行った者も多く存在したことは確かである。しかし、少なくとも王越石の場合は、あくまで豐富な鑑賞經驗によって培った眼力と、商賈人としての才覺を元手として、名だたる名士たちと對等に渡り合い、彼らも刮目するようなコレクションを形成していったのである。そしてその背景には、業種を同じくする一族の結束と有り餘る資金、そして廣範圍に渡る行動力と情報

網とが存在した。そして筆者の前稿第四章以下にて述べたように、吳其貞は、王越石の軌跡をそのままなぞるかのように、彼の地盤を引き繼いで活躍し、名だたる賞鑒家たちと對等の地位を築きあげていったのである。

一方、姜紹書は「定窯鼎記」の結びにおいて、古銅器と陶磁器とを同列に論ずること自體がナンセンスであり、古いからといって有り難がる必要などなく、まして明代の宣窯・成窯までをも珍重する風潮に至っては不可解の一語に盡きる、などと述べている。これはまさしく、明末清初の一流の賞鑒家（あるいはそれを自認する人々）にとっての一般的見解であった。

このように、商業化され墮落の一途をたどる文房清玩趣味と、それに狂奔する俗物どもを見下すポーズをとり續けた姜紹書ではあったが、一方で彼は、

　幷びに藝能多く、凡そ古今の名蹟、一たび品題を經れば、價は十倍に增す（『乾隆丹陽縣志』卷一七「儒林」明）。

と評される一面をも有していた。市場に流通する膨大な量の書畫骨董の名品について、あらゆる人脈を驅使してその動向に關する最新情報をいち早くつかみ、その商品價値に通曉しておくこと。それこそが、實地の鑑賞經驗を積むことと並んで、當時、一流の賞鑒家としての實力と名聲を得るために、缺くべからざる條件だったのである。「定窯鼎記」をはじめ、收藏家についての裏話や傳世の名品にまつわる故事來歷など、『韻石齋筆談』に收められたいくつかの詳細な記事は、彼の關心の所在を如實に示していよう。姜紹書自身も、他の著名な賞鑒家たちと同じく、明末清初における藝術市場の表裏に、誰よりも精通した人物であり、そうであればこそ、彼の鑑定を經た書畫骨董の價格は一〇倍にも跳ね上がったのである。

最後に、丹陽とその周邊における、姜紹書の子孫と、彼の世代以後のコレクターたちについて紹介し、結びに代えたい。

姜紹書には一子があり、名は彥初、一名鶴儕、字は子翥といった。彼は三歲から詩文をよくし、やや長じては非凡な畫才を示したという。一七歲で博士弟子員に補せられ、崇禎一五年（一六四二）には父に從って南京にて同居、鼎革後も、

周亮工・龔鼎孳・王士禎ら諸名士との交遊を傳えられる（『無聲詩史』巻七「姜彦初」・『光緒重修丹陽縣志』巻二〇「文苑」國朝）。また、『韻石齋筆談』巻頭の蔣清の序文において、姜紹書の曾孫の晨玉・元起・元章・顥園らの名が擧げられている。中でも顥園と蔣清とは、園林中の亭子において斷簡零墨を展觀しては、互いに時の經つのを忘れてその得失・眞贋について語り合うという閒柄であったという。[62] 彼らはいずれも、姜紹書と同じく、明の遺民として風雅の道に生きた人々であった。

順治年閒の丹陽において、最も精力的に書畫骨董の蒐集に勵んでいたのは、張範我なる人物である。[63] 彼は姜紹書の生前から、項元汴舊藏の齋侯玉磬や楊文驄舊藏の六螭珮などを入手していた。[64] 吳其貞が張範我のもとに出入りするようになったのは、順治九年（一六五二）秋以降のこと。ここで吳其貞は、倪瓚《獅子林圖》ほか多數の法書・名畫を鑑賞・取引したほか、張範我の女を娶った「世家の子にして書畫を好」む賀仲來、「家は豪富にして書畫を好」む姜紹書など、丹陽の名士のもとにも出入りしている。また順治一三年（一六五六）に、張範我はさきの王君政からも、王世貞・世懋兄弟舊藏の宋の徽宗《雪江歸棹圖》を入手するなど、丹陽は徽州の書畫商人にとって重要な得意先となっていた。[65]

『書畫記』には、唐順之の曾孫も登場する。順治九年（一六五二）八月二日に、「古玩を好み、茶香を嗜み、鑒賞の目力も亦た人に過ぐ」る唐雲客（宇昭）・茂宏（宇量）・仁玉（不詳）三兄弟の家を訪問した吳其貞は、唐氏傳來の宋元の法書・名畫の數々を鑑賞し（『書畫記』巻三「梅道人江山漁樂圖絹畫一幅」）、翌年の八月一〇日には、唐雲客・陶康叔らとともに杭州に向けて旅行、汪然明の家を訪問している。陶康叔は、諱は元祐、唐雲客とは同鄕人で崇禎一六年（一六四三）の進士。汪然明は、歙西の叢睦坊の世家出身で、吳其貞と同鄕、「人となりは風雅にして、才藝多く、交識は天下に滿ち、士林多く之を推重す」る人物であった。[66]

結局、丹陽・常州の書畫骨董コレクターたちは、吳其貞らと深く結びつき、彼の書畫舫の同乘者となって、法書名畫の探訪に出かけるまでに至ったのである。冒頭で、名家傳世のコレクションが書畫商人の手に握られたとする、孫承澤の記

述を紹介したが、彼はそれに續けて「余 見れば輒ちに之を購う」とも述べている（『庚子銷夏記』巻三「沈石田煮雪圖」）。「天崩地解」と表現されるほどの衝撃であった明清鼎革は、一方で當時のコレクターたちにとり、望んでもその影すら窺うことのできぬ傳説の名品に、直接にめぐり逢うことを可能ならしめた千載一遇のチャンス、とも映ったことであろう。吳其貞というこよなき先導者を得て、書畫骨董を蒐集した丹陽・常州の人々、あるいは筆者の前稿第五章第二節にて採り上げた季因是・王廷賓らにとって（もちろん書畫商人たちにとっても）、藝術市場を行き交う書畫骨董に日々出會う中で味わう、一攫千金にも似たその期待感には、堪えられないものがあったはずである。

ともあれ、姜紹書が祕かに自負した丹陽の風雅は、徽州商人抜きには語れない時代を迎えていたのであった。もし、姜紹書が康熙年間以降にも未だ健在で、吳其貞や王君政らが丹陽の人士とともに活躍する様を知ったならば、彼らの姿は、姜紹書の目に果たしてどのように映ったであろうか。

註

（1）古原宏伸「乾隆皇帝の畫學について」（『中國畫論の研究』中央公論美術出版、二〇〇三年）二六四―二六五頁。井上充幸「徽州商人と明末清初の藝術市場――吳其貞『書畫記』を中心に――」（『史林』第八七巻第四號、二〇〇四年）。以下、井上論文については、文中で前稿と略稱。

（2）この點については前掲註（1）の前稿「はじめに」で擧げた諸論考を參照。

（3）曹昭撰・王佐補『格古要論』巻下「古窯器論」古定窯。また宣德年間を中心に、宮廷の主導によって、北宋のいわゆる五大名窯で燒かれた作品のレプリカが盛んに作成された（呂震『宣德鼎彝譜』巻七・八）。

（4）高濂『遵生八牋』巻一四「燕閒清賞牋」上「清賞諸論」、文震亨『長物志』巻七「器具」などの諸書を參照。

（5）王越石の事跡と、藝術市場における彼の果たした役割の重要性については、楊仁愷氏によってすでに指摘されている（楊仁愷『國寶沈浮錄――故宮散佚書畫見聞攷略――』增訂本（遼海出版社、一九九九年）第一章第三節「清代鑒藏家活動概述」二二頁）。また、汪運天「卷內卷外談――讀唐寅《黃茅渚小景卷》而想起――」（『上海博物館集刊』第九期、上海博物館、二〇〇二年）三四六―八頁の中でも、唐寅の畫卷に附された徐守和の跋文について考證する中で、本論文で採り上げた主な史料を引用しつつ、この畫卷の賣

買に關わった王越石の人となりについて言及がある。

（6）王越石の所藏印については、趙孟頫《玄妙觀重脩三門記》（東京國立博物館所藏、後掲註（36）參照）・倪瓚《松林亭子圖》（臺北故宮博物院所藏）に、「王廷琣印」と篆刻された同一の收藏印が捺される。《松林亭子圖》の圖版は『世界美術大全集』東洋編第七卷「元」（小學館、一九九九年）九九頁などを見よ。また、現在は實物が失われた倪瓚《獅子林圖》にも王越石の「鑒賞圖書」があったという（吳其貞『書畫記』卷三「倪雲林趙善長合作獅子林圖紙畫一卷」）。

（7）かつて張玉書が記した姜紹書傳が存在したと傳えられるが（『乾隆丹陽縣志』卷一七「儒林」明）、現行の『文貞公集』ほか、張玉書の著作には收錄されておらず、その原文については未見。

（8）『乾隆丹陽縣志』卷一八「仙釋」。紫柏達觀の丹陽來訪の年次については、范佳玲『紫柏大師生平及其思想研究』（中華佛學研究所論叢二八、法鼓文化、二〇〇一年）附錄一「紫柏眞可年譜」による。この時彼を迎えたのは、地元の望族、賀・孫の二氏であったという。

（9）以上『乾隆丹陽縣志』卷一七「儒林」明。陳繼儒との交際について詳細は不明だが、『瓊琚譜』にはしばしば陳繼儒の言葉が載せられており、その一端をうかがうことができる。

（10）『韻石齋筆談』卷上「金罍」・同書卷下「徽宗高士圖」。この時に受けた誥命册は、後に吳侍御なる人物を介して王鐸のもとに送られ（年次は不明）、題跋が附された（『擬山園選集』卷三九「題跋」二「跋姜二酉誥命册」）。弘光政權のもとで、王鐸と姜紹書とはおそらく直接に面識を持ったと思われるが、それに言及した史料は今のところ見あたらない。跋文中で王鐸は、姜紹書を評して「姜鳳阿先生（姜寶の字）の再來」などと通り一遍のことを述べるにとどまる。また王鐸の弟の王鏞とのつながりについては後述。

（11）『韻石齋筆談』卷下「書家餘派」。當時、董其昌は禮部尚書を拜し、北京に出仕していた。ちなみに、董其昌が吳易（楚侯）なる人物を雇って書の作品を代作させていたのを、姜紹書が目擊したのはこの時のことである。董其昌のもとに書畫の作品の依頼が殺到し、複數の代作者を雇ってそれに應じていたことについては、福本雅一「まず董其昌を殺せ」（『明末清初』同朋舍、一九八七年）を參照。

（12）以上順に、『韻石齋筆談』卷上「翡翠硯」・同書卷下「徽宗高士圖」・『無聲詩史』卷七「姜彥初」・『韻石齋筆談』卷上「節愼庫銅缸」。

（13）『瓊琚譜』卷中「國寶緒言」。この時期の姜紹書については後述。當時の同僚には董祖和（字は孟禮、一作孟履、董其昌の長男）がおり、姜紹書は彼が所有する家傳の黃公望《天池石壁圖》を見たり（『韻石齋筆談』卷下「黃子久天池石壁圖」）、弘光政權下での文臣・武弁に對する恩賞の濫發を嘆き、行く末を案じたりしている（『瓊琚譜』卷中「文臣玉帶」）。

（14）以上『韻石齋筆談』卷上「鼎鳴」・『瓊琚譜』卷上「夔龍

珮」。順治九年（一六五二）七月一八日に、吳其貞が姜紹書の家を訪問しているが（『書畫記』卷三「米元章多景樓詩一首」、後述）、あるいはこの時既に姜紹書は世を去っていたかもしれない。

（15）以上、吳其貞『書畫記』卷二「蘇黃米蔡詩翰四則爲一卷」・郁逢慶『郁氏書畫題跋記』卷一一「石田金山圖」・汪砢玉『珊瑚網』卷四四「勝國十二名家」。北宋の時代に製作された、かかる仿古定窯白磁の遺存例としては、《白磁弦紋三足樽》（北京故宮博物院所藏）・《白磁雙獸耳簋》（臺北故宮博物院所藏）が擧げられる。これらはいずれも北宋宮廷の御用器として特別に制作され（禁廷製樣）、當時の「好古の風」を反映したものとされる。問題の定窯鼎が、はたして北宋傳來の「本物」であったかどうか、結局の所よくわからない。明代には德化窯などで古銅器を模した多くの仿古作品が制作されており（後掲註（23）蔡玫芬論文二七二頁および圖四を參照）、これもその一つであった可能性は否定できないからである。しかし本論考では、明末清初の賞鑒家たちがそれを「本物」と認識していたことが重要なのであって、その眞贋についてはこれ以上問わない。なお《白磁雙獸耳簋》の墨書から、一時期この作品が王鏞の所有に歸していたことが判明する。以上、北宋の仿古定窯白磁については、穆青『定瓷藝術』（燕趙文化系列、河北教育出版社、二〇〇二年）一二一―三頁を參照。

（16）『隆慶丹陽縣志』卷六「選擧」進士・國朝。丹陽縣城の東にある永濟鄕には曲水村なる地名があり（『隆慶丹陽縣志』卷一「建置沿革」鄕里保坊）、この地にちなんだ命名か。

（17）『韻石齋筆談』卷下「河莊淳化帖」。いわゆる「大禮の議」をめぐって、嘉靖八年（一五二九）に楊一淸が失脚した際、とばっちりを怖れた孫育は、恩人の楊一淸を誹謗する文章を密かに用意していたが、そのまま急死してしまい、晩節を汚したというエピソードも傳えられる（陸楫『兼葭堂雜著摘抄』）。

（18）孫楨は、もと孫方の五人兄弟の末子であったが、子無くして死んだ孫育の繼子となった。彼は經史の學から稗官小說に至るまで萬卷の書を讀破し、傍ら醫學にも通じるという多才な文人であった（『姜鳳阿文集』卷二一「石雲居士孫君墓誌銘」）。孫楨と姜寶との關係については後述。また、葉昌熾『藏書紀事詩』卷二の、丹陽孫氏・賀氏についての記述も參照。

（19）姜寶は、文中で「孫男女各二人、孫某某」とのみ記すが（「石雲居士孫君墓誌銘」）、姜紹書は「余の祖の養訥公（おそらく姜士麟の號）、乃ち石雲孫先生の館甥なり」と記す（『韻石齋筆談』卷上「天成太極圖」）。また陳繼儒『陳眉公先生全集』卷一二「孫石雲遺書序」は、孫楨の遺稿の出版に當たって「姜重生」が陳繼儒に委囑した序文だが（年次は不明、『孫石雲遺書』は現存せず）、おそらくこれも姜士麟を指す。文章自體は「姜宮保」、すなわち姜寶撰の墓誌銘を節略したもの。

（20）史乘によれば丹陽が倭寇の大攻勢に見舞われたのは、嘉

靖三四年（一五五五）夏四月から六月にかけてのことであった（姜寶「丹陽縣新城記」『隆慶丹陽縣志』巻一所收）。

（21）『萬曆丹徒縣志』巻三「恩蔭」。伯齡はおそらく靳弘の字と思われるが、『萬曆丹徒縣志』ではその部分が消されていて確認できない。

（22）また姜紹書は『韻石齋筆談』において、故郷の丹陽の誇る文物についてしばしば言及するが、これも同じ意圖に基づくものであろう。たとえば、延陵の季子の墓に刻まれた孔子の書に關する考察や（巻下「延陵十字碑」）、宋代の同郷人、陳東の忠義を顯彰した高宗の綸誥の紹介（巻下「陳少陽綸誥」）など。なお孫育は、正德一一年（一五一六）に、子孫の陳沂・丹陽知縣の申理らとともに『宋陳少陽先生盡忠錄』八巻を增訂・刊行、このとき序文を北京にいた楊一淸に貰い受けている（『善本書室藏書志』巻二九・『隆慶丹陽縣志』巻一二「藝文」所引『盡忠錄』序）。

（23）味岡義人「周丹泉考――明末景德鎭窯の民匠について――」（『集刊東洋學』三九期、一九七八年）・蔡玫芬「蘇州工藝家周丹泉及其時代」（『區域與網路――近千年來中國美術史研究國際學術討論會論文集――』國立臺灣大學藝術史研究所、二〇〇一年）。とりわけ、味岡氏の、當時盛行した玩古（骨董）趣味に關する指摘は重要。

（24）唐順之の門人でもあった王穉登によれば、周丹泉が唐鶴徵のもとに出入りするようになったのは萬曆五年（一五七七）のことであったという。そして、萬曆一九年（一五九一）に成立した『遵生八牋』巻一四「論定窯」において、周丹泉は當代きっての古陶磁（とりわけ定窯白磁）模造の名手として紹介されるまでに至る。彼が唐家傳世の定窯鼎を模造したのも、おそらく萬曆年間前半の時期と見てよいであろう。

（25）流霞盞については李日華『味水軒日記』巻二・萬曆三八年（一六一〇）三月一八日條、また『恬致堂集』巻九にもこれに寄せた七言絶句を收める。流霞盞はその顏料に工夫があるらしく、李日華は三〇金の價を附けて五〇個を送らせるよう手配した。しかしこれらは全て別人によって横領されてしまい、彼の手許に屆くことはなかった。また李日華は、「薄きこと鷄卵の幕の如く、瑩白愛す可し、一枚の重さは半銖」という「卵幕杯」についても絶贊している。これについては『紫桃軒雜綴』巻一。

（26）崇禎一五年（一六四二）五月二二日に、定窯鼎の正副二對を目睹した吳其貞は、兩者の色や質感の相違が明瞭だったことを述べ（『書畫記』巻二「蘇黃米蔡詩翰四則爲一卷」）、この點は姜紹書の話と一致しない。このほか、明末の徽州有數のコレクター、程季白の所有する定窯白磁の爐にも言及するが、こちらについては、吳履震『五茸志逸』巻三「白定爐」の記事と併せ、別稿にて述べる。この白磁爐も、順治九年（一六五二）一〇月二八日段階で、嘉興の姚氏の手を經て王鏞のもとに渡っていたことが、吳其貞によって目擊されている（『書畫記』巻三「高房山瀟湘烟雨圖絹畫一幅」）。

（27）本文中では些かわかりにくいが、結局この後、唐獻可は

杜九如に對して定窯鼎の本物と贋物の兩方を共に與えたようだ。このことは、もしそうでなければ後に續く話の展開にうまく符合しないこと、吳其貞がこの定窯鼎を實見した際に、唐家傳來の本物と周丹泉作の贋物とを同時に鑑賞していること、などから判明する。また、兩方を潔く讓り渡してこそ唐獻可の大物ぶりが生きてこよう。

(28) 文中「虬髯之遇文皇」とあるのは、隋末の亂世に天下取りを目指した虬髯客（姓は張氏）が、後の唐の太宗李世民と出會い、彼を「眞の天子」と見拔いて逃げ去った、という、杜光庭「虬髯客傳」を踏まえる。そして「葉公の好」とは、龍の繪を愛好してやまない葉高が本物の龍に出くわして生きた心地を失った、という、劉向『新序』にある話を踏まえた言葉。並べて置いたとたん、その眞價を輝き現す本物の定窯鼎と、外見だけがそっくりな贋物の定窯鼎との對比も、この唐獻可と杜九如のあり方に對應しており、ひいては姜紹書による「耳食の徒」に對する批判ともなっている。

(29) 錢謙益「母王氏贈安人」によれば、黃正賓の母の姓は王氏（『牧齋初學集』卷九五「太僕寺寺丞黃正賓授承德郎」附）。兄の黃山は、諱は正壽、字は安世、黃山はその號。太學生より光祿寺良醞署署丞に至る（『新安休寧名族志』卷一「居安黃氏」）。

(30) 以上順に、『書畫記』卷二「倪雲林竹梢圖小紙畫一幅」・同書卷三「陸放翁七言梅花詩二首一卷」・同書卷四「李唐夜游圖大絹畫一卷」。

(31) 吳廷に關する傳記史料については、馬泰來「餘淸齋主人吳廷與錦衣劉承禧——晚明二書畫收藏家傳略——」（『明人文集與明代研究』、中國明代研究學會、二〇〇一年）二八九—二九三頁を參照。董其昌と、吳廷をはじめとする徽州のコレクターたちとの交友關係については、汪世淸「董其昌的交游」（Wai-kam Ho eds., *The Century of Tung Ch'i-ch'ang 1555-1636: volume II*, The Nelson-Atkins Museum of Art, 1992 所收）第三部分 鑑藏同好・三 新安朋好（四七三—五頁）に多數の事例を擧げて述べられているので參照されたい。また、中砂明德『江南——中國文雅の源流——』（講談社選書メチエ二五〇、二〇〇二年）第一章「趣味の市場」五九—六〇頁には、萬曆一八年（一五九〇）頃から親交を結んだ董其昌と吳廷とが、互いの名聲と實務能力とを利用しあうことによって、當時の藝術市場を牽引していった樣について論じられている。

(32) 遜之璽卿とは、宰相王錫爵の孫にして「四王」の一人としても知られる王時敏のこと。彼は董其昌の親友でもあった。また、王越石が倪瓚の作品の取引に積極的な樣も注目される。

(33) 李日華をはじめとする嘉興人の記錄には、彼が黃正賓と從兄弟の關係にあったためか、しばしば「黃越石」とも記されているが、同一人物を指していることはほぼ間違いない。

(34) 《長沙帖》（あるいは《絳帖》）とは、數ある《淳化閣帖》のうちでも、宋拓の名品として知られるものの一つで、

この時代既に完本は極めて稀であった。古拓の法帖については、《定武蘭亭帖》も王越石によって持ち込まれており、これに對して李日華は、閣立本作と稱する僞筆の《蘭亭圖》を附するなど餘計な作爲がなされているものの、法帖本體は紛れもなく本物である、という見立てを行っている（李日華『六研齋筆記』卷二）。

（35）李日華『六研齋二筆』卷四。この作品に關する記事は同書卷二にもある。おそらく李日華がこの時に見たのは、移錄された諸家の題跋から《雨後空林圖》と思われる（臺灣故宮博物院所藏）。この作品は萬曆四五年（一六一七）に張丑が見ており（後述）、この時以來ずっと王越石の祕藏作品となっていたようだ。

（36）『恬致堂集』卷三六「元趙文敏書玄妙觀重修三門記」。張丑『眞蹟日錄』初集によれば、この跋文は董其昌・陳繼儒のものと並んで崇禎二年（一六二九）秋日に記されたもの。《殿記》・《三門記》とは、宋代に天慶觀と稱されていた蘇州城內の道觀が、元の至元二五年（一二八八）に玄妙觀と改稱され賜額された際に、三清殿と三門が重修されたことを記念して記された《玄妙觀重脩三清殿記》・《玄妙觀重脩三門記》を指す。《三門記》は現在東京國立博物館に所藏されている。圖版は『海を渡った中國の書――エリオット・コレクションと宋元の名蹟――』（大阪市立美術館展示會圖錄、二〇〇三年）一九二―一九五頁を見よ。

（37）『恬致堂集』卷三七「題王越石藏畫册」。この畫册は、あるいは『六研齋三筆』卷三に登場する、王越石持參の《宋元畫册》を指しているかもしれない。

（38）前揭註（31）中砂書六二―三頁、および井上充幸「明末の文人李日華の趣味生活――『味水軒日記』を中心に――」（『東洋史研究』第五九卷第一號、二〇〇〇年）。

（39）『清河書畫舫』卷四補遺「倪元鎭秋林野興圖詠」。《僦居城東圖》は、現在《水竹居圖》の名で知られ、現在中國歷史博物館が所藏。この日、張丑は王越石が持參した倪瓚《雨後空林生白烟》をも鑑賞しており、これは後に李日華が目睹した《雨後空林圖》に他ならない。

（40）例えば書の作品では、韓世能舊藏の王羲之《謝司馬帖》・唐人臨寫《大道帖》（以上『清河書畫舫』卷二補遺）、項元汴舊藏の徐浩《寶林寺詩》・李邕《永康帖》（以上張丑『眞蹟日錄』二集）、嚴嵩舊藏の趙孟頫《中峰和尙懷淨土詩》・《酒德頌》など（以上『眞蹟日錄』初集）。畫の作品では、嚴嵩・吳廷舊藏の吳道玄《旃檀神像》、沈周《臥游小册》など（以上『眞蹟日錄』初集）。

（41）汪砢玉『珊瑚網』卷四三「韻齋眞賞」。記述中、姓が「黃」とあるが、明らかに「王」の誤り。ちなみに、文中「古繪の兩函」・「二册」とあるのは、この畫册に收められた作品が、汪砢玉によって甲乙の品題を附けられ、二册に分けて裝丁されていたことによるものであろう。

（42）「胡麻飮仙子」とは、天臺山に藥草を採りに行った二人の男が、胡麻飯に導かれて仙女と出會い、半年閒樂しく過ごした後故鄕に戻ると、すでに一〇世代が過ぎており村は荒れ果てていた、という、『神仙記』等に見える故事を踏

まえた言葉であろう。要するに、畫册が戻ってきてみれば、元の主人である自分はすっかり零落してしまっていた、という感慨を述べたものである。

（43）『歴代名瓷圖譜』は、項元汴が自ら蒐集した陶磁器の彩色カタログであり、北宋の五大名窯の傳世品から、明の正德年間の宜興窯砂器に至るまで珍奇な作品が並び、當時の仿古作品愛好の風潮が知られる。原本はすでに失われ、清末の光緒一二年（一八八六）郭葆昌複刻本がある。また、賈瑞林《墨林山人像》（臺北故宮博物院所藏）には、傍らの卓上に臺座を備えた獸面紋鼎が置かれており、定窯鼎の鑑賞方法について具體的にうかがうことができる。鄭銀淑『項元汴之書畫收藏與藝術』（藝術叢刊、文史哲出版社、一九八四年）二五三頁圖版一を參照。

（44）『藏書紀事詩』巻七には、王越石・黄正賓の登場する「定窯鼎記」後半部分が、關連文獻と共に引かれている。姜紹書自身が、王越石と直接面識があったのか、そしてこの定窯鼎の實物を見ていたかについては、實ははっきりしない。しかし、王越石がこの定窯鼎を書畫舫に携えて諸方のコレクターの所を巡っていたことは、他の資料によっても確認でき、姜紹書もこれらのいきさつに關わった複數の人々と直に接していることから、話の骨子はおおむね事實に基づいていると考えてよいであろう。

（45）黄正賓「皇儲册立尚虚輔臣奸計可據疏」（吳亮『萬曆疏鈔』巻一八「發奸類」所收）。カネによって官位を得たことを恥じて、命がけの上奏を決意したとされる。

（46）この時、黄正賓を擁護した東林派の高攀龍・于孔兼・岳元聲らからは、激勵の書簡が寄せられ（『高子遺書』巻八下「與黄黄石」・『于景素先生山居稿』巻六「簡與黄黄石」・『潛初子文集』巻六「與黄黄石」）、徽州の吳懷賢も、黄正賓に宛てた書簡の中で、同郷の先輩に對し大いに敬意を示す（『吳翼明先生存集』「與黄黄石璽卿書」・「候黄黄石符卿啓」）。また、同じく徽州の汪文言も、黄正賓を介して東林黨に接近していった（黄尊素『黄忠端公文畧』巻三「汪文言傳」）。吳懷賢・汪文言はともに、天啓年間の第一次・第二次「黄山の獄」の主犯格として命を落としている。詳しくは小野和子『明末黨社考――東林黨と復社――』（東洋史研究叢刊五〇、同朋舎、一九九六年）を見よ。吳其貞の同族の吳懷賢については、前掲註（1）筆者の前稿第二章第二節を參照。

（47）このときの制誥「太僕寺寺丞黄正賓授承德郎」は『牧齋初學集』巻九五に收められる。

（48）邵輔忠「劾李三才貪險假横四大罪疏」、『神宗實錄』巻四六五、萬曆三七年一二月乙丑條。邵輔忠は、李三才と對立していた沈一貫の同郷人である。姜紹書も本文中で「聲氣を憑藉して縉紳に游び、頗る鼎彝・書畫を蓄う」と述べる。

（49）本文中では、「廷珸と同籍にして、徽州にて中表と稱し、互いに博く骨董を易えて以て娯しみと爲す」と、黄正賓と王越石とが書畫骨董を交換していたことに言及するが、あるいはこの時、親友の王越石が裏から協力していた可能性が考えられる。

(50) 『韻石齋筆談』巻上「文王鼎」。韓芹城は、諱は四維、嵩縣の人。崇禎四年（一六三一）の進士で、孫承澤らと同年、經筵講官を授けられた。彼は後に李自成に投降し、二萬金を積んで國子監司業への任命を求めて弘文館修撰となるも、清軍の北京入城の日に孫承澤と脱出した（李天根『爝火錄』巻一、甲申三月二十六日甲寅條、および同書巻三、甲申五月初三日庚寅條）。吳其貞は順治九年（一六五二）正月以降、蘇州にある韓芹城の古檜堂を幾度も訪れおり、韓芹城が長男の小月ともども江南にて健在であったことを傳える（『書畫記』巻三「張近儀夏山圖小紙畫一幅」ほか）。

(51) 方以智『物理小識』巻八「辯古銅器法」。「溪南の神手」と稱された吳龍なる人物は、宣德の銅爐を模造するほか、漢代の玉を補修して靈壁を作り、山の石で青緑の古銅器を補修、それらの作品は完品と見分けがつかなかったという（『書畫記』巻二「倪雲林竹梢圖小紙畫一幅」）。徽州をはじめ、當時の江南では、かかる技能の持ち主には事缺かなかった。

(52) 『書畫記』巻一「王元章梅月圖小紙畫一幅」。徽州の周邊にはめぼしい窯はない模様で、おそらく吳民も、さきの周丹泉と同じく、山一つ越えた景德鎮まで赴いて仕事にあたったのだろう。前掲註（23）の味岡氏によれば、周丹泉が陶磁器の制作を全て專門職人に任せ、自らは意匠を考え指圖するだけで、作品に自らの姓を冠した可能性についての指摘があり、吳民についてもあるいは同様であったと思われる。

(53) 許重熙『明季甲申日紀附錄』巻三「哀帝」、九月己丑條、および『爝火錄』巻六、甲申九月二日丁亥條。この報復人事は、あるいは『蝗蝻錄』作成の過程で、名前の擧がった黄正賓に狙いをつけたものかも知れない。弘光政權下での黨爭については、前掲註（46）小野書第八章第二節を參照。

(54) 項承恩については、このほか『六軒齋三筆』巻三にも記され、『無聲詩史』巻七「項承恩」も李日華の記述をもとに傳を立てている。姜紹書が彼と面識があったかどうかは不明。

(55) 陳寶良『飄搖的傳統——明代城市生活長卷——』（中國古代城市生活長卷叢書、湖南出版社、一九九六年）九頁。また王世貞は『藝苑巵言』において豐坊の文を評し、「豐道生は骨董肆の如し。眞贋雜陳し、時に亦た寶を見るも、而れども僞詐に堪えず」と骨董店に例えている。いずれも品揃えにろくなものがないと揶揄しているわけであるが、當時の骨董店の雰圍氣と、その流行の様をうかがわせてくれよう。

(56) 姜紹書は「乙酉（一六四五年）夏日に、余 先宗伯の義莊に避暑す。日獻の家と密邇なれば、恒に過りて晤言し、因りて三器を出して余に示す」と記し、黄正賓沒後すぐにこの三つの古銅器を鑑賞している（『韻石齋筆談』巻上「文王鼎」）。丹陽の賀氏は名族として知られ、姜氏とも幾度か婚姻關係を結んでいる。賀日獻もおそらく姜紹書にとって緣續きであった可能性は高く、黄正賓と王越石につい

てのエピソードも、彼の口からつぶさに耳にしていたと思われる。

(57) 『韻石齋筆談』巻上「文王鼎」。この時、王鏞は姜紹書に對し、王維《山水》や嚴嵩舊藏の漢玉雙印、「革命の後、內帑の珍祕は人間に散落」した結果「燕の市」にて入手した「祖母綠」なる寶石三顆など、所藏の書畫骨董を披露している。『瓊琚譜』巻下「祖母綠二」にもこの件を傳える。

(58) 『韻石齋筆談』巻上「文王鼎」。順治九年（一六五二）一〇月二八日に、吳其貞が王鏞のもとで目擊した「黃黃石の青綠天寶鼎一隻」がこれであろう（『書畫記』巻三「高房山瀟湘烟雨圖絹畫一幅」）。

(59) 以上順に、『書畫記』巻三「陸放翁七言梅花詩二首一卷」・「倪雲林臨王淡遊竹梢圖小紙畫一幅」・「蔡君謨小行楷書詩稿一卷」・同書巻四「宋徽宗雪江歸棹圖絹畫一卷」

(60) 李天根は、馬士英が獻上した沈周の繪畫に弘光帝が數字を署したこと、禁中で盛んに演劇を上演したこと、また馬士英がコオロギを鬪わせて遊ぶのを趣味にしていたこと、などを傳える（『爝火錄』巻七、甲申冬十月十日甲子條）。

(61) 崇禎一七年（一六四四）八月辛未には、何應瑞が龍鳳・牀座や宮殿に陳設する金玉などにかかる費用「約數十萬金」について、同年同月壬申には、工部左侍郎の高倬が器皿一萬五千七百餘件にかかる費用六千八百六十餘金・厨役の衣帽の料銀九百四十餘金について、それぞれ節約するよう上奏している（談遷『國榷』巻一〇二）。

(62) 蔣清は明末の丹陽の諸生で、義俠を尊び友情に厚い人物であったと傳えられる（『重修丹陽縣志』巻二五「義擧」國朝）。姜紹書の曾孫たちの詳しい事跡は不明。

(63) 張範我は、諱は伯駿、博雅にして好古を傳えられ、父の恩蔭により通政經廳を拜命したという人物（『無聲詩史』巻四「張伯駿」）。彼の父の張捷は、字は前之、赤函先生と號した。萬曆四一年（一六一三）の進士で「清廉太宰」と稱されたとも傳えられるが、弘光政權下では、閹黨の推擧により吏部尚書に登って人事を掌握したことから、東林派との間に政治問題を引き起こす。翌年、清軍の南京入城に際し、雞鳴山寺にて縊死し、社稷に殉じた（『乾隆丹陽縣志』巻一七「鄉賢」明）。

(64) 『瓊琚譜』巻上「齋侯玉磬」・「六螭珮」。齋侯玉磬は、一六四五年に千夫長の汪六水によって嘉興から掠奪された後、南京に流れ、張範我の手に渡った。汪六水による項氏天籟閣舊藏品の掠奪については、『韻石齋筆談』巻下「項墨林收藏」參照。

(65) 以上順に、『書畫記』巻三「高房山墨竹君圖紙畫一卷」・同書同巻「倪雲林趙善長合作獅子林圖紙畫一卷」・同書同巻「宋元横幅大畫册一本二十四幅」・同書同巻「米元章多景樓詩一首」・同書巻四「宋徽宗雪江歸棹圖絹畫一卷」。

(66) 以上順に、『書畫記』巻三「蔡汴衢山帖」・同書同巻「趙仲穆淵明圖小紙畫一幅」・同書同巻「趙千里明皇幸蜀圖大絹畫一幅」。『藏書紀事詩』巻二所引彭元瑞『知聖道齋讀書跋』によれば、唐宇昭の娘は季因是の三男、季振宜（滄葦）に嫁いでいる。季氏所藏の、前掲註（22）の陳東『盡

忠録』正德刊本には、唐順之の朱筆が入っており、『荆川先生右編』編纂時の底本として使用されたという。また、陳繼儒『陳眉公先生全集』巻二七「汪然明隨喜菴」には、汪然明が贅を盡くして造營した庭園の様子が詠われる。

JIANG SHAOSHU AND WANG YUESHI: THE ACTIVITIES OF THE MERCHANTS OF HUIZHOU AND THE ART MARKET OF THE LATE MING AND EARLY QING AS SEEN IN *YUNSHIZHAI BITAN*

INOUE Mitsuyuki

In the Early Qing period, works of art and antiques assembled by the collectors of the Jiangnan were relinquished by their owners and dispersed in great numbers. Those who sustained this were professional art dealers who were thoroughly versed in the trends in the art market. They were deeply involved in the formation of the collections of art collectors. The reason that these merchants could respond so swiftly in a period of turmoil during the transition from one dynasty to another was that commercialization of art and antiques had already developed by the end of the Ming, and subsequently the art market particularly in Jiangnan was a mature one.

In this article, I deal chiefly with two contrasting individuals, Jiang Shaoshu 姜紹書 and Wang Yueshi 王越石. I examine the various issues accompanying the development of the "commercialization" of arts and antiques in late-Ming, early-Qing period, such as the problems concerning the authenticity of the works for which there was a great demand, and the dynamism of commerce, its diversity and distribution on the part of the merchants.

Jiang Shaoshu, who is famed as connoisseur of art and antiques, has left valuable testimony regarding the art and antique boom at the close of Ming and beginning of the Qing periods in a record of his personal experiences. These are contained in his work entitled *Yunshizhai bitan* 韻石齊筆談 and the *Dingyaodingji* 定窯鼎記 therein details the complete dispute over the authenticity of a white porcelain Dingyao ding (a Ding ware tripod vessel) and the fate of the people involved with it are vividly depicted.

The protagonist of the *Dingyaodingji* was Wang Yueshi, a dealer in arts and antiques from Huizhou. He crisscrossed Jiangnan dealing in arts and antiques for more than twenty years, beginning at the close of the Wanli era. Due to his wealth of experience as a connoisseur, he equipped himself with an ability to appraise objects second to none in the literati elite of the age. Armed with this ability and his talent as a merchant, he was able to deal on equal terms with famed

collectors and form a collection that rivaled their own. Behind this success was the solidarity of his family who operated in the same business, a surplus of funds, and the existence of widely exercised capacity for action and a network of information.

On the other hand, for Jiang Shaoshu and other literati, it was necessary to have the opportunity to appreciate a great number of antiques and works of art in order to attain fame and acuity as elite connoisseurs. Moreover, in regard to the enormous number of works of art circulating in the art market, grasping the latest information on trends at the earliest possible moment, and becoming well versed in the prices of works were important preconditions. To this end, the merchants who played the role of go-betweens, introducing their many objects and much information to collectors in each locality, were indispensable to the literati. Additionally, from the merchants' point of view, receiving the assurance of value of works of art from the literati was of course of great benefit in doing business.

Jiang Shaoshu maintained the pose of disdaining the commercialization of the fancy for the accoutrements of the studies of the literati as a step down the road to decadence and the philistines who frenzied after them, but literati and the merchants of arts and antiques had a mutually dependent, symbiotic relationship. In order to spend their lives indulging their tastes, the elite literati required the merchants of Huizhou as indispensable partners, and Wang Yueshi was the consummate example of such a person.

A RECONSIDERATION OF CHINESE, JAPANESE AND RYUKYUAN RELATIONS IN THE XIANFENG-TONGZHI (MEIJI RESTORATION) PERIOD: THE PROBLEM OF THE INVESTITURE OF SHOH TAI AND ITS BACKGROUND

NISHIZATO Kikô

The turbulent period of the Xianfeng-Tongzhi eras of the Qing dynasty and of the Meiji Restoration in Japan had a profound impact on the Ryukyu kingdom as well, inducing simultaneously many problems that troubled relations between the Ryukyu kingdom and both China and Japan. In this study, I first focus on the problems regarding of dispatching of Ryukyuan embassies to Beijing and Edo and secondly on the investiture of Shoh Tai 尚泰 by the Qing and Meiji emperors and the many problems associated with it. I consider the reality of the unprecedented